

仙台教会の歴史シリーズ その15
バプテストとなっていく歴史

はじめに

「艱難汝を玉にす」(かんなん・なんじを・たまにす)という言葉があります。人は多くの困難を乗り越えてこそ立派な人物になる、という意味です。中国の古典に出てくる言葉か、あるいは戦国武将の誰かの言葉なのかと思っていましたが、広辞苑いわく英語のことわざからきているそうです。「Adversity makes a man wise.

(逆境は、人を賢明にする)」ということわざは元々フランス起源らしいのですが、このことわざの日本語の表現が、「艱難汝を玉にす」となるようです。

本音を言えば、誰だって艱難などに遭遇しない順風満帆な人生を望みます。ただ、そううまくいかないのが私たちの現実です。艱難は嫌なこと、避けたいことではありますが、どうも全否定すべきことでもないようです。「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」(ローマ 5:3-4)、あるいは「火のような試練を…喜びなさい」(Iペトロ 4:12-13)などと、聖書は確信を持って語っているからです。

1. 歴代牧師と専任牧師不在期間

仙台教会の歴代の牧師とその在任期間、そして前任者が退任してから後任者が就任するまでの間に生じた「専任牧師不在期間」¹⁾は、次の通りです。

長崎直得	牧師	1953/02/22~1954/03	在任	1年	→専任牧師不在期間	2カ月 ²⁾
関谷定夫	〃	1954/06/02~1957/03	〃	2年10カ月	→	〃 0カ月 ³⁾
大沼上	〃	1957/04/01~1963/03	〃	6年	→	〃 3カ月 ⁴⁾
天野五郎	〃	1963/07/07~1984/07	〃	21年	→	〃 4カ月半 ⁵⁾
金子純雄	〃	1984/12/13~1998/03	〃	13年3カ月	→	〃 1年 ⁶⁾
青木康弘	〃	1999/04/04~2002/07	〃	3年3カ月	→	〃 8カ月 ⁷⁾
山下誠也	〃	2003/03/26~2010/05	〃	7年2カ月	→	〃 1年3カ月 ⁸⁾
小河義伸	〃	2011/09/04~2020/09	〃	9年	→	〃 8カ月 ⁹⁾
宇都宮毅	〃	2021/06/01~現在) ¹⁰⁾	〃	3年6カ月	※2024年12月現在	

天野五郎牧師以前のことに関しては資料が乏しく、専任牧師不在期間の教会の様子はほとんど分かりませんが、不在期間が短かったことや、グラント宣教師が強いリーダーシップを恐らくとっておられたと考えられますので、教会運営に関してはさほど支障はなかったのではと想像します。

2. グラント宣教師夫妻の休暇帰国の中で

但し、1955年（昭和30）から56年（昭和31）にかけては、牧師ではなく頼りの宣教師が不在の特別な年でしたので話は別です。当時の宣教団では、宣教師は5年間日本で働いて1年間休暇帰国するというシステムをとっていました。それに従い、1950年（昭和25）8月に来日したグラント宣教師夫妻が第1回目の休暇帰国を得たのは、1955年春です。この1年間は、教会にとっても幼稚園にとっても試練の1年だったことでしょう。宣教師夫妻の休暇帰国直前の3月25日に仙台教会は教会組織を行い¹¹、前年4月には幼稚園を開園¹²しています。いずれもグラント師やキャサリン夫人が全面的に関わり、大きな責任を担い実現した大事業です。その大黒柱が不在となったのですから、教会員や幼稚園職員、そして特に前年に赴任したばかりの関谷定夫牧師は、大いに戸惑い苦勞したはずです。『献堂四十周年記念誌』に関谷牧師が「仙台教会草創時代の思い出」と題する一文を寄せてくださっていますが、その中で次のように述懐しています。

「一番困ったことは、グラント先生が一年間休暇で帰米された時、小生が園長代理をしましたが、それまでグラント先生個人の経営だったので、急に経営資金が底をついてしまって、先生方の給与が保育料だけでは十分払うことができず、ベースアップの要求にも応じられなくなり、中に入った父母会の方々からも吊し上げにあったことです」。

この大変な状況を、具体的にどのように切り開いていったのかは不明ですが、宣教師に頼れない以上、自分たちで何らかの解決策を見つけていかなければなりません。教会員たちも必要に迫られ色々と知恵を出し合いながら、幼稚園のことや教会のことを真剣に考えざるを得なかったはずです。そしてその様なことを通しながら、自分たちの教会のことを自分たちの事柄として考え、自分たちが為すべきことを為すというバプテスト本来の姿勢が、少しずつ育てられていったのでしょう。

バプテストがどのような考えに立つ教会であるのか知識として知っていても、それだけでバプテスト教会になるわけではありません。自分たちがその知識に従って実際に生きることで、教会はバプテストになっていくのです。その意味で、宣教師の休暇帰国制度は宣教師やその家族にとって大切ですが、同時に宣教師に頼れなくなる教会にとっても、成長のための極めて重要で意味のある時間です。

3. バプテストとなっていく

天野牧師以降の時代には、牧師交代時に比較的長期間の専任牧師不在期間が生じています。宣教師の休暇帰国期間同様、専任牧師不在期間は、教会にとっては試練の時であることは事実です。同時に信徒にとっては訓練と成長の時でもあることを、仙台教会の歴史は物語っています。専任牧師が不在となっても、もちろん毎週の主日礼拝は途切れることなく守られ続けます。説教は宣教師や教会員、そして他教会の牧師や信徒にもお願いすることになります。これまで様々な方々の協力があったことを有り難く思いますが、自分自身のことを考えると教会員になった当初は、この様な時は「どこかの誰かが助けてくれる」のであり、自分が教会員として主体的に関わるべきことであるなどとは思いませんでした。天野牧師の辞任（1984年）で生じた4カ月半の専任牧師不在期間の礼拝回数と、仙台教会の教会員が礼拝で説教を担当した回数から割合を出すと、教会員の説教担当率は16%であり、外部からの協力が当たり前のような感覚を、私を含め教会員たちは持っていたと言えるでしょう¹³。

しかし、その後40年近くの間、私たちの中にバプテストとしての信仰の自覚が、少しずつ育まれてきたように思います。その証拠に、金子牧師辞任（1998年）後の1年間の専任牧師不在期間における教会員の説教担当率は55%に跳ね上がり、青木牧師辞任（2002年）後の8カ月間は69%、山下牧師辞任（2010年）後の1年3カ月間は83%、そして小河牧師辞任（2020年）後の8カ月間は、主日礼拝のなんと96%を、仙台教会の教会員が説教を担当しました。

信徒一人ひとりが自ら聖書を読み、聖霊の導きのもとでの真摯な学びと祈りの中で御言葉を解釈し、示された内容を信仰の言葉として自覚的に語り、皆でその御言葉を分かち合いながら共に礼拝を守り教会を形成していく姿勢は、正にバプテストです。これからもバプテストとなる道を共に歩み、バプテストとして成長してまいりましょう。（文責：小林孝男）



信徒説教を担当する教会員の吉永馨さん(2020/3/29)

¹ 一般に「無牧」(牧師がいない)という言葉が使われることが多いが、ここではあえて「専任牧師不在(期間)」という言葉を使用する。なぜなら、専任牧師がいなくとも協力牧師がいる場合は、字義的には「無牧」に該当しないことになるからである。

² 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革_教会員名簿)

³ 同上

資料(1974/11/10_献堂 20年の歩み)

⁴ 資料(2015/10/18_60年のあゆみ) 1頁

⁵ 週報(1963/07/07、1984/07/29)

⁶ 週報(1984/12/09、1998/03/29)

⁷ 週報(1999/03/28、04/04)、資料(2002/10/06_青木康弘前牧師辞任の経緯についての報告書)

⁸ 週報(2003/03/23、2010/05/30)

⁹ 週報(2011/09/04、2020/09/27)

¹⁰ 週報(2021/05/30)

¹¹ 『主の息吹の中で』74頁

¹² 資料(1954/04/13_新しい型の幼稚園_河北新報夕刊)

¹³ 天野五郎牧師の辞任から金子純雄牧師着任までの19回の主日礼拝で、説教・証しを教会員が担当したのは3回のみである。他の16回の説教担当は、他教会の牧師や宣教師であった(金子純雄牧師4回、C.S.ボートライト宣教師4回、庄司真牧師2回、T.R.ウッズ宣教師2回、M.ウッズ宣教師1回、R.L.アラム宣教師1回、野口直樹牧師1回、大沼上牧師1回)